

St. Luke's International University Repository

ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): elderly demented patients, caregivers, fabricated world, information processing, inference 作成者: 南川, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/379

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



原 著

ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程

南川 雅子¹⁾

要 旨

本研究の目的は、ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程を知るために、ケア提供者がどのような情報を得てそれらをどのように情報処理し、どのような推測を行うのかを明らかにすることである。

概念枠組みとして、認識心理学における認知的場の推測の方法およびD. E. Rumelhartの人間の情報処理の過程を示す概念図を基盤とし、ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程の概念モデルを作成した。この概念モデルに基づき、参加観察、面接、基礎データ収集で得られたデータを用いて、ケア提供者が対象老人の虚構の世界を推測する過程と推測内容、推測の程度と推測過程の関連性について分析を行った。

12名のケア提供者のデータを分析した結果、以下のことが明らかになった。ケア提供者は虚構の世界を推測するために、徘徊や異食などの日常生活障害、および老人の過去の家庭生活や職業等に注目していた。これらの情報の数はいずれも 7 ± 2 の範囲内であった。また、痴呆による障害が重度で会話が困難な老人の場合にケア提供者が虚構の世界を推測するためには、障害が重度で会話が可能な場合の約2倍の数の情報を用いていた。これらの情報の処理に関しては、はじめに注目した情報数やその後はじめの情報に基づいて詳細に観察して得た情報数よりも、パターン合成された情報数が多い者ほど、対象老人の虚構の世界を十分に推測していたことが明らかになった。

キーワードズ

痴呆性老人、ケア提供者、虚構の世界、情報処理過程、推測

I. はじめに

痴呆とは、知能すなわち認知、記憶などの要素的な能力の上に立った総合的な判断力や適応能力が後天的に崩壊した状態で、大脳皮質の神経細胞の障害により生じるものである。治療としては知的機能の改善として1997年にアリセプト[®]が23カ国で認可され、次いでイギリスにおいて1998年に軽度から中等度のアルツハイマー型痴呆の進行を遅らせる薬剤としてエキセロン[®]が認可されているが、いずれも治癒を期待できるものではない¹⁾。厚生省の「痴呆性老人の将来推計数」²⁾によると、2000年には痴呆性老人の人数が、65歳以上の人口の7.1%である156万人に及ぶと予測されている。そこで痴呆性老人対策は、ケアを要する高齢者の

増大として、これからの高齢者の保健福祉対策において最重要の課題となっている。

雨宮³⁾によればアルツハイマー型痴呆の老人（以下痴呆性老人）は、彼らの私的世界である虚構化された過去の世界（以下虚構の世界）に生きており、これは理論的因果関係、時空間、損得などを超越した世界で、感性が行動の決定因になっている。したがって、痴呆性老人のケアを行う際には、ケアする側がこの虚構の世界を認め、その世界で痴呆性老人が感性豊かに生活できるようにすることが重要である。虚構の世界を認めた上でのケアは、端から見ればまるでお芝居やごっこ遊びのようである。しかし、痴呆性老人のケアとしては、生活環境をその人が快適に暮らせるように整え（舞台設定）、個々の虚構の世界に合わせた対応（シナリオ作り）が重要であり、ケア提供者がこのようなケア技術を身につけているか否かは、痴呆性老人のケア

1) 聖路加看護大学講師（老人看護学）

の質に大きく影響する。現在のところ、このような痴呆性老人のケア技術に関する研究は行われていない。そこで本研究では、痴呆性老人専門の施設で働くケア提供者が、痴呆性老人の虚構の世界を推測する際、どのような情報を得て、それらの情報をどのように処理し、どのような内容の推測を行うのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究目的

1. ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程において得た情報および情報処理の方法を明らかにする。
2. ケア提供者が推測した虚構の世界の内容を明らかにする。
3. 虚構の世界を推測する過程において得た情報および情報処理の方法が、推測内容に影響することを明らかにする。

III. 用語の操作的定義

痴呆性老人：アルツハイマー型痴呆のある65歳以上の人で、自宅での介護が何らかの理由で困難であるために、痴呆性老人専門の施設に入所している人。

虚構の世界：個々の痴呆性老人が現実として認識している虚構化された過去の世界。個々の痴呆性老人の認識的場のこと。

ケア提供者：特別養護老人ホームで痴呆性老人を専門にケアしている看護師および介護者のこと。

情報処理：ケア提供者が虚構の世界を推測する過程において、対象となる痴呆性老人に関する様々な情報を複雑な思考パターンへと変換し、そのパターンから虚構の世界を推測すること。

虚構の世界の推測の内容：ケア提供者が推測した個々の痴呆性老人の認識的場の現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックの4つの要素で構成された虚構の世界の一部。

現象的自己：特定の瞬間において痴呆性老人がもつ個人の認識全部、すなわちその痴呆性老人によって認識された自己のこと。

外的事象の意味：痴呆性老人の環境がその人にとって特定の瞬間にもっている意味のこと。

目標：現象的自己の中で分化したもので、認識に対して秩序化および選択的効果を持つ。マズローの基本的欲求の階層に示された一つ一つのカテゴリーは目標に含まれる。

テクニック：痴呆性老人が欲求を満足させる手段。

ある目標に到達、あるいは目標を回避するための適切な手段のこと。

IV. 概念枠組み

認識心理学における認識的場の推測の方法および D. E. Rumelhart の人間の情報処理の過程を示す概念図を基盤とし、ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程の概念モデルを作成してこれを本研究の枠組みとした。

虚構の世界は個々の痴呆性老人の認識の上に成り立っており、それはすなわち個々の痴呆性老人の認識的場である。したがって虚構の世界および虚構の世界での行動は、個々の痴呆性老人の見地からでなければ理解できないものであり、認識心理学における認識的場の推測の方法は、虚構の世界を知るために有効であると考えられる。

ケア提供者は、認識的場の推測の方法を用いて虚構の世界を知る過程において、痴呆性老人に関する多くの情報を処理する。この情報処理の過程は、外界の情報が複雑な思考パターンに変換され、そのパターンが行動へと変化してゆく過程であり、認知心理学の分野で多くの研究が行われている。D. E. Rumelhart はこの分野で行われた多くの研究から明らかにされた人間の情報処理の過程を概念図にまとめている。ケア提供者が認識的場の推測方法を用いて虚構の世界を知るためにたどる情報処理の過程をこの概念図によって理解することは、本研究において有効であると考えられる。

認識心理学によれば⁴⁾ 認識的場とは図1に示すように、現象的環境、現象的自己、自己概念によって構成されている。認識心理学者がある人の認識的場を推測するときは、観察できる行動を手がかりとしてそれを推測し、推測を検証するというプロセスをたどる⁵⁾。観察の内容には、その人から得られた情報、観察された行動、客観的なデータなどが含まれる。認識的場の全てを知ることは不可能であるため、これらの情報を統合して認識的場の主要な分化のタイプである現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックを推測することによって認識的場を推測するのである⁶⁾。

一方、D. E. Rumelhart⁷⁾ の人間の情報処理の概念図によると、図2に示すように人間の情報処理システムは大きく感覚システム、パターン認識システム、記憶システムの3つに分けることができる。物理的刺激、すなわち視覚の入力、聴覚の入力が各感覚受容器に当たり、受容器の発射パターンを変化させる。このパターンが一時的な感覚記憶であるアイコニック・ストアーとエコイック・ストアーに記録され、短時間保存されてパターン認識システムに送られる。分析のこの段

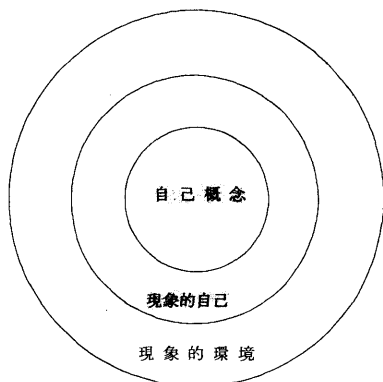


図1 認識的場の図示

階で、基本的な特徴の抽出が行われる。特徴抽出器の出力はパターン合成器に送られる。この装置は抽象化された感覚入力のイメージを再構成するために、抽出された特徴と長期記憶である二次記憶から検索された情報とを利用して、データ駆動型処理であるボトム・アップ処理と概念駆動型処理であるトップ・ダウン処理を同時進行させる。この再編成された抽象的な表象が、一次記憶内で一時的に活性化される。これら種々の処理装置あるいはその下位過程のそれぞれに処理能力が配分される。

以上のようなD. E. Rumelhartの人間の情報処理に関する概念図に認識的場の推測の方法を組み込んで、ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測する過程の概念モデルを作成した(図3)。この概念モデルで

は、観察内容として痴呆性老人自身の言葉、観察された行動、痴呆性老人の背景に関する情報などが含まれる。これらの情報は感覚システムを経て、パターン認識システムの一部である特徴抽出器に送られ、基本的な特徴の抽出が行われる。特徴抽出器の出力はパターン合成器に送られる。パターン合成器は抽象化された感覚入力のイメージを再構成するために、抽出された特徴と、対象に関する情報に基づいて二次記憶で検索された情報とを利用して、ボトム・アップ処理とトップ・ダウン処理を同時進行させる。こうして再構成された情報は、対象となる痴呆性老人の虚構の世界、つまり認識的場の推測内容である現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックとして、一時記憶内で一時的に活性化される。

V. 研究方法

1. 対象

1) 痴呆性老人

地方の一特別養護老人ホームに入所している65歳以上の老人で、長谷川式簡易知能評価スケールによる評価が10点以下で痴呆に分類され、医師によってアルツハイマー型痴呆と診断されており、施設長の許可が得られた者とした。

2) ケア提供者

同施設に勤務し、痴呆性老人を専門にケアしている看護者および介護者で、対象となった老人(以下対象老人)をケアしており、本研究の目的と方法を理解し、

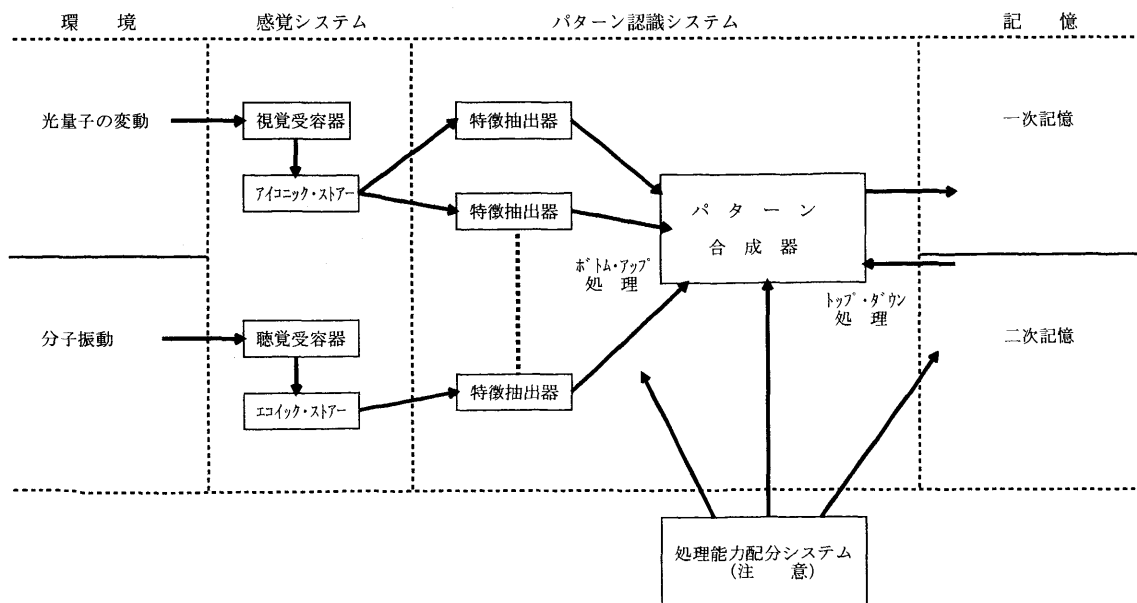


図2 環境、感覚システム、パターン認識システム、および記憶システム間の交互作用を示す概念図 (D.E.Rumelhart,1977,一部加筆)

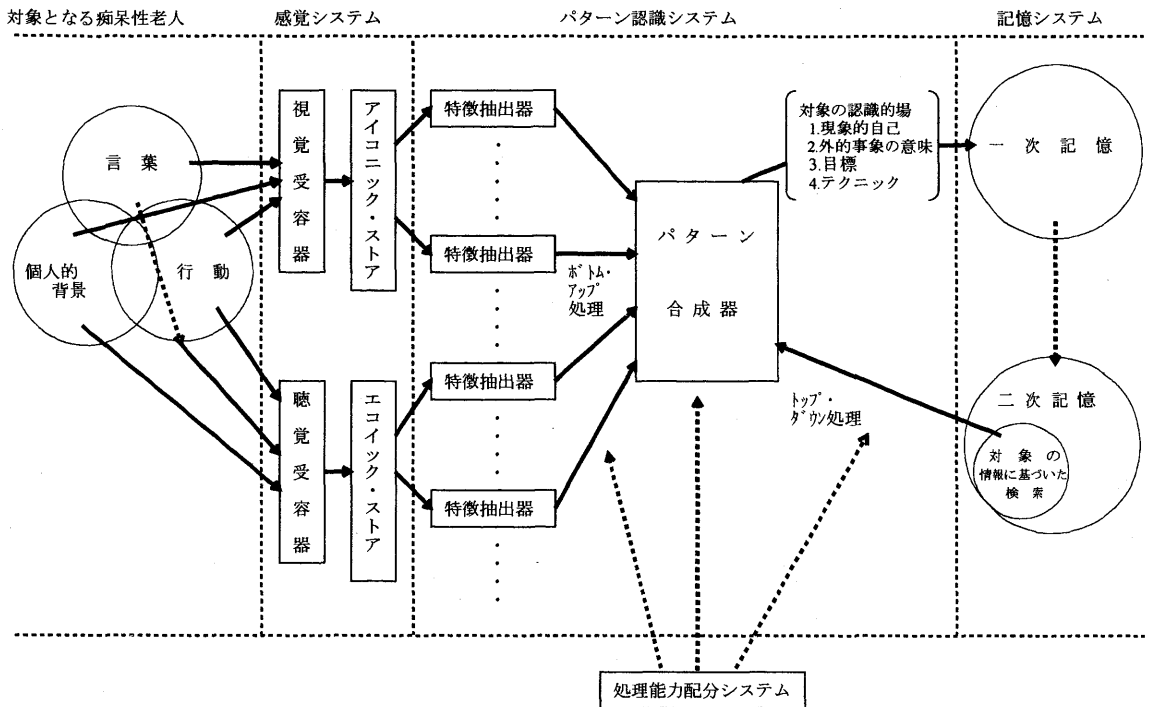


図3 ケア提供者が対象となる痴呆性老人の虚構の世界を探求する過程の概念モデル

ケア提供者間での情報交換をしないことを了解して参加に同意した者とした。なお、介護者については個々の教育背景は異なるが、痴呆性老人のケアについては施設長による専門的な知識・技術教育が行われ、共通の理解があるため、対象に含めることとした。

2. 測定用具の作成

1) 虚構の世界を推測する過程に関する質問紙

ケア提供者が対象老人の虚構の世界を推測するためにどのような情報を得て、どのような情報処理の過程をたどり、どのような推測を行ったのかを知るために、虚構の世界を推測する過程に関する半構成的質問紙を作成した。

質問紙の項目は、ケア提供者がはじめに注目した情報について、その情報に関してさらに詳細を観察して得られた情報について、対象老人の背景に関して得た情報について、収集した情報から推測した対象老人の虚構の世界の内容についての4項目で構成した。なお、収集した情報から推測した対象老人の虚構の世界の内容についての質問は、現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックについての4項目で構成した。回答は面接による自由回答法とした。

2) ケア提供者の背景に関する質問紙

ケア提供者の特性を明らかにするために、ケア提供者の背景に関する質問紙を作成した。質問項目は、年

齢、看護者または介護者としての勤務年数、資格、痴呆性老人及び介護（看護）についての捉え方等の9項目で構成した。回答はケア提供者による自記式とした。

3) 対象老人の背景に関する基礎データシート

対象老人の特性を明らかにするために、対象老人の背景に関する基礎データシートを作成した。項目は、年齢、性別、入所年月日、診断名、家族構成および家族歴、結婚歴、職歴、教育歴、生活歴、趣味・嗜好・習慣・性癖・信仰など、現病歴、既往歴、ADLの障害の様子、行動の特徴、現在の介護計画に関する16項目で構成した。

3. GBSスケール

対象老人の痴呆の総合的な状態像を把握するためにGBSスケールを用いて痴呆症状の評価を行った。このスケールは運動機能6項目、知的機能11項目、感情機能3項目、痴呆によく認められるその他の症状6項目から構成されており、Gottfriesらが考案した原本は高い信頼性・妥当性が認められている。日本語訳は1990年に新井らが行っており、各項目毎の信頼性が検証されている⁸⁾。

4. 推測された虚構の世界に関する評価基準の作成

ケア提供者が推測した対象老人の虚構の世界の内容

を評価するために、評価基準を作成した。作成方法は、研究者自身が3名の対象老人を4ヵ月観察し、各対象老人の虚構の世界を推測し、これを分析して虚構の世界の現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックを推測した。この期間中、研究者自身による推測の方法や内容に関して、施設内担当医師および施設長の指導を受けた。これを基にして指導教授と検討しながら評価基準を作成した。そしてこの評価基準に照らしながら、現象的自己と目標については内容を評価し、外的事象とテクニックについては各ケア提供者が推測した数を測定した。

5. データ収集方法

1) 参加観察

参加観察は、ケア提供者が対象老人の虚構の世界を推測する過程でどのような情報を得るかを知らず、あらかじめ各ケア提供者が対象老人の虚構の世界を推測することを目的としてケアを行うと表明した場合に行った。観察場面は、各ケア提供者が対象老人の行動を観察している場面、および対象老人とのコミュニケーションの場面とした。その際、ケア提供者の同意があれば会話をテープに録音した。ただし、対象老人がテープ録音することに不快を示すような態度・言動があった場合には録音を中止した。なお、1ケア提供者の対象とする老人は、S、O、Mの3名とした。

2) 面接

面接は、参加観察で得た情報を基に、ケア提供者が虚構の世界を推測する過程を明らかにすることを目的として、半構成的質問紙を用いて行った。面接時期は、参加観察を行った当日または面接可能な最も早い時期とした。その際、面接内容は承諾を得てテープに録音した。面接の場所は施設内の空いている居室、または面接室で、面接時間は20～50分で平均25分であった。

6. パイロットスタディ

2名のケア提供者に実施した。計画の段階ではデータ収集方法として参加観察と面接の他にthinking aloudを計画していた。しかしパイロットスタディの結果、thinking aloudは、対象老人が個室ではなく一つの大きなフロアの中で他の入所者と共に生活しており、常に動いている状態であること、またケア提供者と対象老人との自然な関わりを損ねるという2つの理由によりデータ収集方法として適切でないことが明らかになった。そこでケア中にはケア提供者と対象老人との自然な関わりを参加観察し、できるだけ早い時期に面接でケア提供者の得た情報と情報処理過程を明らかにすることとした。また、虚構の世界は個々の痴呆性老人によって異なり、推測過程はケア提供者によっ

て差があるため、データが複雑であることが明らかになったため、対象とする痴呆性老人を3名にすることとした。

7. 分析方法

分析に用いるデータは、参加観察と面接、および基礎データ収集で得られたすべての資料、およびGBSスケールによる痴呆症状の評価結果とした。

1) 虚構の世界を推測するためにケア提供者が注目した情報の抽出

各ケア提供者が、虚構の世界を推測するためにどのような情報に注目したのかを明らかにするために、以下の3つの観点で情報を抽出した。

- ・はじめに注目した情報
- ・注目した情報に関してさらに詳細を観察して得た情報
- ・対象老人の背景に関して得た情報

2) ケア提供者が注目した情報の分類

ケア提供者が虚構の世界を推測するために注目した情報がどのような情報でそれらをどれだけ集めたかを明らかにするために、1)で抽出した情報を種類別に分類し、各ケア提供者が注目した情報の数を測定した。

3) ケア提供者が推測した虚構の世界の内容の抽出

各ケア提供者が推測した虚構の世界がどのようなものであったかを明らかにするために、対象老人別に現象的自己、外的事象の意味、目標、テクニックの4つの観点で内容を抽出した。

4) 虚構の世界の内容の評価

各ケア提供者がどの程度虚構の世界を推測したのかを明らかにするために、評価基準に基づいて評価した。評価方法は、現象的自己と目標に関しては内容を評価し、外的事象の意味とテクニックに関してはケア提供者が推測した数を測定した。

5) 評価結果に基づくケア提供者の分類

虚構の世界を推測するための情報量と情報処理の過程を比較するために、対象老人別に推測の程度に基づいて、ケア提供者を3つのカテゴリーに分類した。カテゴリーは、十分に推測していた(X)、部分的に推測していた(Y)、ほとんど推測していなかった(Z)の3つとした。

6) 情報量と情報処理過程の明確化

分類されたカテゴリーの虚構の世界を推測するための情報量と情報処理過程を明らかにするために、1)と3)で得られたデータと面接で得られた会話記録を基に、概念モデルの情報処理の過程に沿って、以下の観点について明らかにした。

- ①ケア提供者がはじめに注目した情報

表1 ケア提供者の背景

No	年齢	臨床経験	痴呆性老人のケア経験	資格	痴呆性老人との主なコミュニケーション手段
D	52	5.2(年)	5.2(年)	介護福祉士	言語+非言語
E	49	5.2	5.2	なし	言語+非言語
F	2	5.2	5.2	なし	言語+非言語
G	52	13.3	3.9	准看護婦	言語+非言語
H	38	4.3	4.3	介護福祉士	言語+非言語
I	20	0.2	0.2	介護福祉士	言語
J	27	6.3	2.3	看護婦	言語+非言語
K	28	4.8	4.8	介護福祉士	言語
L	28	1.3	1.3	なし	言語
M	21	1.3	1.3	介護福祉士	言語
N	35	1.3	1.3	なし	言語
O	31	3.3	3.3	准看護師	言語

表2 ケア提供者の痴呆性老人および介護(看護)についての捉え方

[介護(看護)について]	
痴呆性老人の人格及び残存能力を尊重する	8(名)
個別ケアが必要である	5
痴呆性老人を混乱させないケアが重要である	3
明るく接することが重要である	1
[痴呆性老人について]	
老人個々の障害が異なる	2
優れた能力を秘めている	1
生活障害を持っている	1
特別な人ではない	1

- ・ 感覚システムからパターン合成器に送られた情報の種類と数
 - ・ パターン合成器で処理された情報の種類と数
- ② 注目した情報に関してさらに詳細を観察して得た情報
- ・ パターン合成器で処理された情報の割合

③ 二次記憶の検索の内容と数

7) 情報量と情報処理過程の比較

虚構の世界の推測の程度によって、虚構の世界の推測における情報量と情報処理の過程が異なるかどうかを明らかにするために、6) で明らかにされたものについて各カテゴリー間の比較を行った。情報量の比較は、統計学パッケージHALBAUを用いて記述統計およびT検定により行った。

IV. 結果

1. 対象の背景

1) ケア提供者

対象となったケア提供者は12名で、女性が10名、男性が2名であった。対象の背景は表1に示したように、平均年齢33.9歳(SD=10.0)、平均臨床経験年数4.3年(SD=40.0)、痴呆性老人のケアの平均経験年数3.2年(SD=23.4)であった。ケア提供者の痴呆性老人および介護(看護)についての捉え方は表2に示すように、「痴呆性老人の人格および残存能力を尊重する」と記した者が最も多く8名、「個別ケアが必要」と記した者が5名、「痴呆性老人を混乱させないケアが必要」と記した者が3名などであった。

2) 痴呆性老人

対象老人は3名で、その背景は表3に示した。対象老人は長谷川式簡易知能評価スケールでは0~2点で痴呆に分類され、柄澤式臨床的判定基準では+4で非常に高度のほけに分類された。またGBSスケールではSが94点で最も高値であり、記憶障害の他、集中力の障害、注意の保持力の障害、落ち着きなさ等の項目が特に高値を示していた。さらにSは、言語的コミュニケーションが困難な状態であった。Oは60点で、記憶障害の他に、注意の保持力の障害、落ち着きなさが高値であった。Mは51点で、記憶障害以外では特に高値を示す項目は認められなかった。

2. ケア提供者が注目した情報

1) 対象老人Sに関する情報

ケア提供者がはじめに注目した情報の数は(表4)、

表3 対象老人の背景

対象老人 年齢 (性別)	S 65 (女性)	O 80 (男性)	M 72 (女性)
診断名	アルツハイマー型老年痴呆	アルツハイマー型老年痴呆	アルツハイマー型老年痴呆
GBS評価(点)			
運動機能	16	5	12
知的機能	48	31	30
感情機能	19	8	3
その他	14	16	8
合計	94	60	51
ADL状況	食事：自立 洗面：自立 排泄：トイレまで誘導。便器をまたぐことが分からない、紙の使い方がわからないので一部介助 入浴：行動を指示すれば洗える 着脱：自立だが、汚れた際には促しが必要 運動：自立	食事：自立 洗面：付き添って声かけが必要 排泄：トイレの場所が分からず放尿する 入浴：拒否するため介助 着脱：自立だが、汚れた際には促しが必要 運動：自立	食事：自立 洗面：自立 排泄：トイレの場所が分からず失禁する 入浴：同じ部分しか洗わないため介助 着脱：自立だが、汚れた際には促しが必要 運動：自立
行動の特徴	ゴミや虫、便など、落ちているものを集めて洋服の中や押入にしまい込んだり食べたりする。発語は限られており、「専務さん」「白い」「印鑑」以外の言葉はほとんどでない。徘徊も激しい。時に各部屋の扉を閉めて歩くことがある。	独語が激しい。ほとんど日中は鏡に写った自分に向かって話しかけている。フロアにいるときには話しながら椅子やテーブルを移動して歩くことがある。徘徊は独語しながら。	敷いてある布団をいじってぐちゃぐちゃにする。寝ている人の世話をしようとする。徘徊もみられる。
生活歴	18歳で結婚。子供6人をもうける。夫は暴力的な人で、不仲であった。夫が無職のため、日雇い労働者として長いこと勤め、別府の緒観の仲居等を勤めた後、62歳まで皿洗いをして生計を立てていた。夫と死別後は、離婚した娘と孫2人と同居	24歳で結婚。4女をもうける。33歳で出兵、シベリヤで捕虜となる。帰国後は農業のかたわら、湯ノ花作りの職人として働く。性格は温厚、几帳面、凝り性	尋常高等小学校卒業後、家事の農業を手伝う。昭和16年に結婚。二男三女をもうける。結婚後も家事の傍ら、自宅で稲作を手伝う。性格は温厚、朗らか、親しみやすい。

表4 対象老人別ケア提供者が目じた情報数

	平均	SD	最大値	最小値
はじめに注目した情報の数	S 4.3	1.0	6.0	3.0
	O 2.8	1.3	5.0	1.0
	M 2.0	0.9	4.0	1.0
詳細を観察して得た情報の数	S 13.0	3.0	18.0	8.0
	O 9.8	4.9	22.0	4.0
	M 5.7	2.3	11.0	2.0
背景に関して得た情報の数	S 2.6	1.2	5.0	0.0
	O 3.3	1.4	6.0	1.0
	M 2.1	1.2	5.0	0.0

平均4.3個であった。これらの情報は、日常生活行動の中でも特に日常生活障害(問題行動)といわれるものが主であった(表5)。多くの者が注目した情報は、「話す言葉が限られている」(12名)、「徘徊」(10名)、「異食」(8名)であった。注目した情報に関してさらに詳細を観察して得た情報の数は平均13.1個であった。

背景に関して得た情報の数は、平均2.6個であった。これらの情報は、対象老人の家庭生活や職業に関することであった。その中で多くの者が注目した情報は、「夫が乱暴・身勝手な人であったこと」(9名)、「仕事に関すること」(8名)、「上司に貯金を騙し取られたこ

表5 ケア提供者がはじめに注目した情報と背景に関する情報（対象老人Sの場合）

〈はじめに注目した情報〉		〈背景に関する情報〉	
・話す言葉が限られている	12（名）	・夫が乱暴，身勝手であったこと	9
・徘徊	10	・仕事に関すること（旅館の仕事，洗い場の仕事等）	8
・異食	8	・上司に貯金をだまし取られたこと	6
・食事に関する変わった癖	3	・子供に関すること	2
・収集壁	3	・生まれや年齢に関すること	2
・自分の食べ物を人に与える	3		
・臍に異物を入れる	2		
・戸を閉めて回る癖	2		
・猫をかわいがる	2		
・弄便	1		
・置いてある靴をいじる	1		
・ベッドメイキングをする	1		
・人の肩もみをする	1		
・逃げ足が速い	1		
・よく気がつく	1		
・優しい	1		

表6 ケア提供者がはじめに注目した情報と背景に関する情報（対象老人Oの場合）

〈はじめに注目した情報〉		〈背景に関する情報〉	
・鏡に向かって話しかける	10（名）	・湯ノ花作りの職人であったこと	10
・トイレに執着する	6	・民生委員や自治会長をしていたこと	10
・徘徊	5	・性格（几帳面，まじめ，温厚等）	9
・椅子を動かす	5	・農業をしていたこと	6
・入浴を拒否する	3	・家族に関すること	5
・独語	3	・戦争に行ったこと	4
・蛇口や洗面台を壊す	1	・居住地に関すること	2
・一つのことに執着する	1	・ゴルフ場の手伝いをしていたこと	1

表7 ケア提供者がはじめに注目した情報と背景に関する情報（対象老人Mの場合）

〈はじめに注目した情報〉		〈背景に関する情報〉	
・布団をいじる	12（名）	・家族に関すること	9
・タンスや押入をいじる	3	・家事や家業などに関すること	6
・掃除の手伝いをする	3	・出生地と居住地に関すること	5
・徘徊	1	・性格（強制されるのを嫌う）	2
・入浴を嫌う	1	・動物好き	1
・こたつを片づけてしまう	1		
・話し方について	1		
・猫を追いかける	1		
・同じ場所にずっといる	1		

と」(6名)であった。

2) 対象老人Oに関する情報

ケア提供者がはじめに注目した情報の数は，平均2.8個であった（表4）。これらの情報は，日常生活の

中で，特に日常生活障害と言われるものであった（表6）。その中で多くの者が注目した情報は，「鏡に向かって話しかける」(10名)，「トイレに執着する」(6名)，「徘徊」(5名)，「椅子を動かす」(5名)であった。注

表8 各ケア提供者が推測した対象老人Sの虚構の世界

No	現象的自己	外的事象の意味	目 標	テクニク
D	旅館の仕事をしている若い自分 仕事をばりばりしている現役時代	1個：施設＝職場	仕事を全うする 整理整頓	7個：カーテンを全部蝶結びにする、扉を全部閉めて歩く、ポータブルトイレを押し入れにしまう、布団をたたんで歩く、数えながら徘徊する、おだてるのがうまい、言葉が丁寧
E	旅館の仕事をしている自分	2個：人＝専務さん 施設＝一次的に職場になる	仕事を全うする、人の機嫌をとる 何かを人から（取られないように）隠す	8個：置いてある靴をしまう、歩きながらゴミを拾う、食後に食器をきれいになめる、人を専務さんと呼ぶ、人に接するときに自分は下手に出る、数を数える、食便、膣の中に異物を入れる
F	旅館で働いている自分	0個	仕事における役割を全うする	3個：細かいゴミや虫を拾う、戸を閉めて回る、言葉は過去に事件に関係した言葉である
G	いつも仕事（洗い場の仕事）をしている自分	1個：施設＝職場	仕事を一生懸命する	5個：食事中に茶わんをきれいに並べる、食事中に食べ物をきれいに並べる、数を数えて徘徊する、男性入所者の肩たたきをする、自分より強い立場と思われる人に専務さんという言葉を使う
H		0個	逃げる、人を寄せつけない	3個：逃げ足が早い、相手の機嫌を取って何も危害を加えられないようにする、戸を締め切る癖
I		0個		0個
J	専務さんの下で働いている自分（ホテルの仕事）	2個：施設＝仕事場（ホテル）、寮母＝上司	仕事を一生懸命する	4個：靴を丁寧にそろえて持ち主に渡す、言葉が定年、寮母に対して専務さんと呼ぶ、数を数えて徘徊する
K	いつも不安や恐怖を持っている	1個：施設＝自分に何か関係ある場所	不安から逃れる 自分の身を守る	4個：徘徊、収集癖、寝るときには必ず戸をきちっと閉める、敷き布団を自分の身をくるむようにして曲げて寝る、押し入れて寝る
L		0個		0個
N		0個	他者への親切、奉仕	2個：自分の食べるものを人に分けて食べさせる、をいじる
P		0個		0個
Q	専務さん対自分の世界	0個	周囲をきれいにする	2個：異食、置いてある靴をいじる

目した情報に関してさらに詳細を観察して得た情報の数は、平均9.8個であった。

背景に関して得た情報の数は、平均3.3個であった。これらの情報は、対象老人の職業や性格に関するものであり、多くの者が注目したのは「民生委員や自治会長をしていたこと」(10名)、「湯ノ花作りの職人であったこと」(10名)、「性格（几帳面、まじめ）」(9名)であった。

3) 対象老人Mに関する情報

ケア提供者がはじめに注目した情報の数は平均2.0個であった(表4)。これらの情報は、日常生活障害

が主であり、12名全員が「布団をいじること」に注目していた。さらに詳細を観察して得た情報の数は、平均5.7個であった。

背景に関して得た情報の数は、平均2.1個であった。これらの情報は、家庭生活に関するものであり、最も多く注目されていたのは「家族に関すること」(9名)であり、次いで「家事や家業などに関すること」(6名)、「出生地と居住地に関すること」(5名)であった(表7)。

3. ケア提供者が推測した虚構の世界の内容

表9 各ケア提供者が推測した対象老人Oの虚構の世界

No	現象的自己	外的事象の意味	目 標	テクニク
D	家長あるいは村の世話役的立場	2個：鏡に写った自分＝身内の人，他人入所者＝村内の人たち	世話役として村内を円満に納める	2個：徘徊中に時々後ろを振り返っては「早く来い」「急がなか」とせきたてる，餅つきや餅まきのことを心配する
E		0個		0個
F	民生委員や町内会会長のような役職についている自分	3個：鏡に写った自分＝自分以外の誰か，椅子＝何か大きくて重たいもの，施設＝場合によっていろいろ変化する	何か仕事をしなければならぬ	2個：架空の人に向かって話しかけるまたは急かしながら徘徊する，入浴拒否
G	民生委員や町内会会長等のような責任ある仕事を任されている自分	3個：施設＝地域社会，鏡に写った自分＝阿部君，トイレ＝安らげる場所	誰かをどこかに連れてゆく	3個：誰もいないのに話しかけながら歩く，鏡に向かって問いかける，ひたすら歩き続ける
H	30才くらいで現役で働いており，忙しくいつも体を動かしている自分	1個：鏡に写った自分＝弟または阿部君	自分の仕事を完璧にこなす	5個：早く歩く，早くしゃべる，独語，鏡に相談する，演説をしているようにしてしゃべる
I	仕事場での指導的立場で，働き盛り。鶴見に住んでいる	2個：鏡に写った自分＝仕事仲間，施設内＝仕事場	仕事上，責任ある仕事を果たす	1個：鏡の中の相手（仕事仲間）に向かって指導的立場で話す
J	現役で働いている，元気で忙しい自分。責任ある役についている	1個：鏡に写った自分＝弟または知人の阿部君	みんなを引っ張ってゆかなければならないという責任感，責任を果たす	2個：一日中仕事のことを考えて大きな声で誰かに話しかけながら歩く，鏡に向かって話しかける
K	現役で農業をしている70代の自分。責任ある立場にいる	3個：施設＝仕事場あるいは自宅（本人の設定によって変化する），椅子＝本人の設定によって異なる，鏡に写った自分＝最も身近な人	農業や民生委員等の仕事に関する心配事を解決する	4個：鏡に向かって話す，困ったと言って徘徊する，椅子を持ち上げる，入浴を拒否する
L	仕事一筋，仕事に情熱を持って働いている自分	1個：鏡に写った自分＝顔見知りの人	仕事をしなければならぬ	3個：ホールの椅子を持ち歩く，水道の蛇口や洗面台を動かして壊す，独語
N	村のまとめ役をしている自分	3個：鏡に写った自分＝友人・いとこ，施設＝山や仕事場等で友人が周囲に多数いる	仕事として，人を動かす	3個：架空の友人に声をかける，鏡に向かって話す，入浴を拒否する
P	湯の花を一生懸命作っている若い自分	2個：トイレ＝風呂，鏡に写った自分＝友人	湯の花を作る	2個：トイレに閉じこもる，鏡に向かって話す
Q	働き盛りの50代で，農業をいくらでもしなければならぬ自分	2個：鏡に写った自分＝弟・いとこ，顔見知りの職員＝いとこ・知人	用事や仕事をしなければならぬ，家に帰らなければならない	3個：徘徊する，鏡に話しかける，ねじり鉢巻きをする

表10 各ケア提供者が推測した対象老人Mの虚像の世界

No	現象的自己	外的事象の意味	目 標	テクニク
D	主婦として家族に頼りにされている自分	3個：施設=家族または村内、寝ている男性入所者=夫、女性入所者=村内の知人	家族の信頼に応える	3個：布団をいじる（結果的に布団をくしゃくしゃにしたり、他の入所者の布団を取ってしまう）、掃除をする、自分の飲み物を人に与える
E	自宅で家事や農作業をしている自分	3個：施設=自宅、男性入所者=夫、施設の猫=自宅の猫	主婦業をこなす	2個：布団をいじる、頼むと掃除をしてくれる
F	夫と子供がいて、母親であり妻である自分	2個：施設=自宅、他入所者=おいさん、とおちゃん、または知人	母親あるいは妻としての役割を全うする	4個：他入所者の布団をかける、たんすの中をいじる、押し入れをいじる、出ている布団をしまう
G	家庭の主婦で、元気なころの自分 夫と住んでいる	3個：畳の一室=自宅、男性入所者=夫または息子、女性入所者=近所の人	家庭内の仕事を全うする	3個：たんすをいじる、布団を出し入れする、食器を食堂から持ってくる
H	兼業農家のしっかりしたお母さんである自分	4個：親しい入所者=前のおばさん、その他の入所者=近所の人、施設=村内、男性が寝る畳の居室=自宅	一家の主婦として近所付き合いをしてゆく（つき合いを大切にす）	4個：食事中同じテーブルの入所者に世話をやく、布団をいじる、食事中でも周囲に気を配る、他の入所者と独特の話し方で世間話をする
I	静養に来ているが共同生活をしており、そのための役割を一部担っている	2個：施設=自分の住まい、自分が接する人=近所の人	共同生活の中で自分も一緒に働く	3個：寝る前に他入所者の布団をかけて回る、しまった布団を出す、男性入所者の世話をやく
J	世話焼き女房	2個：特定の男性入所者=夫、施設=家	家事をする（主婦の役割をこなす）	2個：布団をいじる、掃除をする（とことんやり通す）
K	若く、農業等のつき合いの友達と一緒にいる主婦としての自分	2個：入所者=近所の人たち、施設=近所の人たちが集まる広場	働いたり人の世話をしたりして主婦としての日常生活を継続する	2個：布団を出し入れする、こたつを片づける
L	家から近所の公民館に寄り合いに来ている主婦としての自分 年齢は70代	3個：施設=公民館、和室の一部=自宅、入所者=近所の知人	地域社会の中の仕事を担い、家事もする	3個：掃除の手伝い、タオルをたたむ手伝い、布団を片づける
N	家庭の主婦である自分	2個：施設=何となく人がわいわいと集まっている場所、入所者=知人	主婦として人の世話をやく	3個：布団をいじる、掃除を手伝う、自分の食べ物を人に与える
P	常に夫と一緒にいて子供は小学生である主婦としての自分	2個：入所者=知人、寝ている男性=夫	家での生活を継続する	2個：布団に執着する、寮母の手伝いをする
Q	夫がいて子供が2人いる主婦である自分	3個：施設=（夜のみ）家、寝ている入所者=子供、入所者=部落の人	家庭の仕事をする	3個：夫の話しているかのように寝ている人に話しかける、男性入所者のところに行き話しかける、布団をかける

表11 対象老人Sの虚像の世界の推測内容

1. 現象的自己：旅館において専務さんの下で働いている自分
2. 外的事象の意味：施設＝仕事場（旅館）、寮母＝専務さん
3. 目標：旅館において、自分の仕事を全うする。自分の身を守る
4. テクニック：数を数えながら徘徊する、ゴミや虫等落ちている物を拾う、徘徊しながら開いている戸を閉める、徘徊しながらカーテンを結ぶ、人を褒める、男性入所者の肩もみをする、誰も入れないように部屋を閉め切って逃げる、食事中に皿をきれいに並べる、食後手できれいに皿を拭く、自分の食べ物の人を与える

表12 対象老人Oの虚像の世界の推測内容

1. 現象的自己：指導的な、あるいは責任のある立場にいる自分
2. 外的事象の意味：施設＝仕事場または村内、鏡に写った自分の姿＝身内または知人、トイレ＝仕事場、机や椅子＝石
3. 目標：村内または家族または仕事に関して責任ある立場としての役割を全うする
4. テクニック：鏡に向かって話をする、いかにも誰かがいるように引率したり話しかけながら徘徊する、村内の行事を心配しながら徘徊する、トイレに執着する、ホールにある机や椅子を動かす、入浴拒否

1) 対象老人Sの場合（表8）

虚構の世界の内容の4項目すべてを推測していたケア提供者は5名(42%)で、部分的に推測していた者は4名(33%)、まったく推測できなかった者は3名(25%)であった。

現象的自己は7名(58%)の者が推測しており、最も多かった内容は、「旅館あるいは洗いの仕事をしている自分」(5名)というものであった。外的事象の意味は5名(42%)の者が推測しており、推測した数は平均0.6個で、最も多かった内容は、「施設を職場と認識している」(4名)ということであった。目標は9名(75%)の者が推測しており、最も多かった内容は「仕事を全うする、または仕事を一生懸命する」(5名)であった。テクニックは9名(75%)の者が推測しており、推測した数は平均3.2個であった。多かった内容は、

表13 対象老人Mの虚像の世界の推測内容

1. 現象的自己：農家の主婦で、近所付き合いを大切にしている自分
2. 外的事象の意味：施設＝村内、居室の一部＝自宅、男性入所者＝夫、入所者＝村内の知人、親しい女性入所者＝近所の親しい人
3. 目標：農家の主婦として家事をしたり、地域社会の中でのつき合いを大切にしている
4. テクニック：寝ている入所者を世話をし、たんすをいじる、押し入れをいじる、布団をいじる、食事中同じテーブルの人の世話をし、掃除を手伝う、親しい入所者と徘徊する、自分の食べ物を人に与える

「収集癖に関すること」(6名)、「数を数えながらの徘徊」(4名)、「言葉が丁寧であること」(4名)であった。

2) 対象老人Oの場合（表9）

虚構の世界の内容は、11名(91.7%)が4項目すべてを推測していたが、1名はまったく推測できなかった。現象的自己の内容は、「村や仕事場での指導的立場にいる自分」(7名)、「農業や湯ノ花作りなどを行っている自分」(3名)等であった。推測した外的事象の意味の数は平均1.9個であり、最も多かった内容は、「鏡に映った自分を身内の人か知人と認識している」(11名)というものであった。目標は11名全員が仕事に関することと推測しており、その内容で最も多かったのは「仕事をしなければならぬという責任感」(6名)であった。推測されたテクニックの数は平均2.9個であった。多かった内容は「いかにも誰かがいるかのように話しかけながら徘徊すること」(9名)、「鏡に向かって話しかけること」(8名)であった。

3) 対象老人Mの場合（表10）

12名(100%)が虚構の世界の4項目すべてを推測していた。現象的自己は11名(91.7%)が「家庭の主婦あるいは農家の主婦である自分」という内容であった。推測された外的事象の意味の数は平均2.6個であった。最も多かった内容は「入所者を家族あるいは近所の人と認識している」(12名)であった。施設に関しては「自宅と認識している」(4名)、「村内あるいは近所の人たちが集う場所」(4名)、前者と後者の両方を推測した者が4名であった。目標は11名が「主婦としての役割を全うする」と推測していた。推測されたテクニックの数は平均2.9個であり、最も多かった内容は「布団をいじる」(12名)であった。

表14 現象的自己および目標の評価基準

評価		A	B	C
対象老人 S	現象的自己	旅館で働いているという内容が表現されている	旅館で働いているということは明らかでないが、対象老人の行動を説明する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない
	目標	仕事における役割を全うするという内容が表現されている	仕事に関することは明らかでないが、対象老人の行動を説明する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない
対象老人 O	現象的自己	指導的な、あるいは責任ある立場にいるという内容が表現されている	責任ある立場ということは明らかでないが、対象老人の行動を説明する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない
	目標	責任を果たすという内容が表現されている	責任を果たすということは明らかでないが、対象老人の行動を説明する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない
対象老人 M	現象的自己	農家の主婦であるということが表現されている	農家の主婦ということは明らかでないが、対象老人の行動を説明する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない
	目標	農家の主婦としての役割を全うするという内容が表現されている	農家の主婦の役割ということは明らかでないが、対象老人の行動に関する何らかの内容が表現されている	まったく推測されていない

表15 外的事象の意味およびテクニックの評価基準

	外的事象の意味	テクニク
対象老人 S	<ul style="list-style-type: none"> 施設＝仕事場（旅館） 寮母＝専務さん 	<ul style="list-style-type: none"> ・数えながら徘徊する ・ゴミや虫等落ちている物を拾う ・徘徊しながら開いているドアを閉める ・徘徊しながらカーテンを結ぶ ・人を褒める ・男性入所者の肩もみをする ・誰も入れないように部屋を締め切って逃げる ・食事中に皿をきれいに並べる ・食後手できれいに皿を拭く
対象老人 O	<ul style="list-style-type: none"> ・施設＝仕事場、または村内 ・鏡に映った自分の姿＝身内または知人 ・トイレ＝仕事場 ・机、椅子＝石 	<ul style="list-style-type: none"> ・鏡に向かって話をする ・いかにも誰かがいるように引率して歩く ・いかにも誰かがいるように話しかけながら徘徊する ・村内の行事のことを心配しながら徘徊する ・トイレに執着する ・ホールにある机や椅子を動かす ・入浴拒否
対象老人 M	<ul style="list-style-type: none"> ・施設＝村内 ・居室の一部＝自宅 ・男性入所者＝夫 ・入所者＝村内の知人 ・親しい女性入所者＝近所の親しい人 	<ul style="list-style-type: none"> ・寝ている入所者の世話をする ・たんすをいじる ・押し入れをいじる ・布団をいじる ・食事中、同じテーブルの人の世話をする ・掃除を手伝う ・親しい入所者と徘徊する ・自分の食べ物を人に与える

表16 虚構の世界の推測の程度による分類

カテゴリー 対象老人	X	Y	Z
S	D,E,F,G,J (5)	K,Q (2)	H,I,L,N,P (5)
O	D,F,G,H,I,J, K,N (8)	L,P,Q (3)	E(1)
M	D,E,F,G,H,I, J,K,L,N,P,Q (11)	I (1)	(0)

D~Qはケア提供者。 ()内は人数を示す。

4. 虚構の世界の推測内容の評価

研究者が作成した虚構の世界の推測内容及び評価基準は表11~15に示すとおりである。この評価基準に基づいてケア提供者が推測した虚構の世界の内容を評価した結果に基づいて、ケア提供者を十分に推測していた(X)、部分的に推測していた(Y)、ほとんど推測していなかった(Z)の3つのカテゴリーに分類した

(表16)。その結果、対象老人Sの場合はカテゴリーXに属する者が5名、Yが2名、Zが5名であった。また対象老人Oの場合はXが8名、Yが3名、Zが1名であった。対象老人Mの場合は、Xが11名、Yが1名、Zに属する者はなかった。

対象老人Sの場合のXに属する者は、臨床経験年数および痴呆性老人をケアした経験年数が長かった。この2項目において、X-Z間では5%確率で有意差が認められた。また、普段の痴呆性老人とのコミュニケーションの際に言語的コミュニケーションに加え非言語的コミュニケーションを用いる者が多い傾向にあった。対象老人OおよびMの場合には、カテゴリー間においてケア提供者の背景による差は認められなかった。また、対象老人のGBSスケールによる障害の程度はSが最も重度であり、ついでO、Mであったことから、対象老人の痴呆の程度が重度になるほどカテゴリーXの人数が減り、Zの人数が増えており、痴呆の程度が重度であるほど虚構の世界を推測しにくいという傾向が認められた。

5. 虚構の世界の推測過程と推測内容との関連性

虚構の世界の推測における情報量と情報処理の過程

表17 虚構の世界の推測における情報量の比較 (対象老人Sの場合)

		平均	SD	最大値	最小値	
はじめに注目した情報	感覚システムからパターン合成器に送られた情報	X	4.2	0.7	5.0	2.0
		Y	3.5	0.5	4.0	3.0
		Z	4.8	1.2	6.0	3.0
	パターン合成された情報	X	3.0	0.6	4.0	2.0
		Y	2.5	0.5	3.0	2.0
		Z	0.8	1.0	2.0	0.0
詳細を観察して得た情報	感覚システムからパターン合成器に送られた情報	X	14.4	3.8	18.0	8.0
		Y	12.5	1.5	14.0	2.0
		Z	12.0	1.8	14.0	10.0
	パターン合成された情報	X	7.6	2.8	11.0	3.0
		Y	5.5	0.5	6.0	5.0
		Z	1.8	2.2	5.0	0.0
二次記憶の検索		X	3.0	1.1	5.0	2.0
		Y	2.5	0.5	3.0	2.0
		Z	1.2	1.0	2.0	0.0

表18 虚構の世界の推測過程における情報（対象老人Sの場合）

カテゴリー	No	はじめに注目した情報（有効数/全数）	合成された詳細な情報の割合	二次記憶の検索（合成された回数：内容）
X	D	①決まった言葉* ②徘徊* ③食事に関する癖 ④異食 (2/4)	56%	2：旅館の仕事，家庭生活
X	E	①限られた言葉* ②若く感じる* ③食便* ④臍に異物を入れる* (4/4)	65%	5：旅館の仕事，夫と不仲
X	F	①徘徊* ②限られた言葉* ③収集癖* (3/3)	88%	3：旅館の仕事，過去の事件
X	G	①徘徊* ②臍に異物を入れる ③言葉が少ない* ④異食 ⑤食事時の癖 (2/5)	41%	3：洗い場の仕事
X	J	①異食* ②徘徊* ③限られた言葉* ④口に物を人にふるまう ⑤猫をかわいがる (3/5)	25%	2：ホテルの仕事
Y	K	①徘徊* ②異食 ③収集癖* ④限られた言葉* (3/4)	36%	3：自衛する，過去の事件
Y	Q	①部屋を全部閉めて回る ②限られた言葉* ③異食* (2/3)	55%	2：過去の事件，綺麗好き
Z	H	①収集癖 ②しゃべり言葉 ③優しさ ④よく気がつく ⑤戸を閉める癖* ⑥逃げ足が速い* (2/6)	36%	2：夫から迫害を受ける
Z	I	①決まった言葉 ②徘徊 ③弄便 ④食事に関する癖 ⑤自分の飲み物を人に与える ⑥肩もみをする (0/6)	0%	0
Z	L	①限られた言葉 ②異食 ③徘徊 (0/3)	0%	0
Z	N	①徘徊 ②ベッドメイキング ③自分の物を人に与える* ④置いてある靴をいじる* ⑤限られた言葉 (2/5)	29%	2：親切心
Z	P	①言葉が限られている ②落ちている物を何でも食べる ③猫が好き ④徘徊 (0/4)	0%	2：皿洗い，貧乏な生活

*印はパターン合成された情報（推測に有効であった情報）を示す。

表19 虚構の世界の推測における情報量の比較（対象老人Oの場合）

		平均	SD	最大値	最小値	
はじめに注目した情報	感覚システムからパターン合成器に送られた情報	X	2.8	1.4	5.0	1.0
		Y	3.3	0.5	4.0	3.0
		Z	1.0	—	—	—
パターン合成された情報		X	1.8	1.0	4.0	1.0
		Y	2.7	0.5	3.0	2.0
		Z	0.0	—	—	—
詳細を観察して得た情報	感覚システムからパターン合成器に送られた情報	X	10.6	5.3	22.0	4.0
		Y	9.7	2.5	13.0	7.0
		Z	4.0	—	—	—
	パターン合成された情報	X	4.3	2.1	8.0	2.0
		Y	5.3	0.5	6.0	5.0
		Z	0.0	—	—	—
二次記憶の検索		X	1.6	0.7	3.0	1.0
		Y	2.7	0.5	3.0	2.0
		Z	0.0	—	—	—

表20 虚構の世界の推測過程における情報（対象老人Oの場合）

カテゴリー	No	はじめに注目した情報（有効数/全数）	合成された詳細な情報の割合	二次記憶の検索（合成された回数：内容）
X	D	①鏡に向かってしゃべる* ②一日中トイレにいる ③徘徊* (2/3)	50%	2：村内の世話役
X	F	①鏡に向かって話しをする ②トイレに執着する ③徘徊* ④椅子を動かす ⑤入浴拒否* (2/5)	36%	2：民生委員をしていた町内会の会長をしていた
X	G	①人の世話を焼く(徘徊)* ②トイレが気になる ③朝の入浴拒否 (1/3)	20%	1：民生委員をしていた町内会の会長をしていた
X	H	①便所を気にする ②鏡に向かって話しかける* ③机や椅子を動かす ④しゃべり方が早い* (2/4)	50%	2：民生委員をしていた
X	I	①鏡に写った自分に向かって話しかける* (1/1)	40%	1：人の上に立つ仕事をしていた
X	J	①いつも鏡を見ている* (1/1)	50%	1：民生委員などの責任ある仕事
X	K	①鏡に写った自分と対話する* ②徘徊* ③椅子を持ち上げる* ④トイレに執着する* (4/4)	70%	3：民生委員をしていた農業であった
X	N	①鏡に向かって話す* ②一つのこと執着する (1/2)	30%	3：村のまとめ役であった
Y	L	①蛇口や洗面台を壊す* ②椅子を持って歩く* ③独り言を言う* (3/3)	46%	3：仕事一筋の人
Y	P	①トイレに閉じこもっている* ②鏡に向かって話す* ③阿部君と言う ④椅子を動かす (2/4)	56%	2：湯ノ花作りをしていた
Y	Q	①徘徊* ②鏡を見ながら話しをする* ③風呂をいやがる* (3/3)	71%	3：働き盛りの人
Z	E	①いつも鏡に向かってしゃべっている (0/1)	0%	0

*印はパターン合成された情報（推測に有効であった情報）を示す。

が、推測の程度に影響するかどうかを明らかにするために、対象老人SとOの場合について、各カテゴリー間の比較を行った。

1) 対象老人Sの場合

〈はじめに注目した情報〉に関しては、感覚システムからパターン合成器に送られた数が、Xは平均4.2個、Zは4.8個であった(表17)。またこれらのうち、推測に有効であった情報数(パターン合成された情報)は、Xは3.0個、Yは2.5個、Zは0.8個であり、十分に推測していた(X)がほとんど推測していなかった(Z)の3.8倍の情報数であることが明らかになった。Xに属するケア提供者は、「決まった言葉」または「限られた言葉」と「徘徊」に関する情報をパターン合成して虚構の世界を推測していた(表18)。

注目した情報をさらに〈詳細に観察して得られた情報〉に関して、パターン合成された割合を見てみると、Xは25~88%、Yは36~55%、Zは0~36%の範囲であった。Xに属する全員が、「徘徊」および「限られた言葉」に関する情報を対象老人Sの職業的背景に関する情報と合成して虚構の世界を推測し、Sの行動を

説明していたのに対して、Yは「限られた言葉」に関する情報を「仕事上の上司に騙された」事件と合成していたが、十分な推測をすることはできなかった。また、Zは感覚システムからパターン合成器に送られた情報を背景的な情報と合成しておらず、推測がほとんどできなかった。〈詳細を観察して得た情報〉のうちで推測に有効であった情報数の平均を比較すると、Xは7.6個、Yは5.5個、Zは1.8個であり、XはZの4.2倍の情報数を有していたことが明らかになった。

〈二次記憶の検索〉による情報が情報処理に用いられた回数の平均は、Xは3.0回、Yは2.5回、Zは1.2回であった。Xに属する全員が「旅館の仕事」「皿洗いの仕事」のような背景の情報に基づいて〈二次記憶の検索〉を行い、推測していた。一方Yに属する者とZの一部の者は、「自衛する」「きれい好き」のように、〈はじめに注目した情報〉に基づいて〈二次記憶の検索〉を行っており、部分的な推測にとどまった。Zの一部の者は、〈二次記憶の検索〉による情報を情報処理のために用いておらず、推測をするに至らなかった。

以上より、Xは情報のトップ・ダウン処理とボト

ム・アップ処理が同時に効率よく行われたのに対し、YとZはボトム・アップ処理が先行し、効果的な情報処理が行われなかったといえる。

2) 対象老人Oの場合

〈はじめに注目した情報〉に関しては、パターン合成器に送られた数の平均は、Xは2.9個、Yは3.3個、Zは1.0個であった(表19)。これらの情報のうちで推測に有効であった情報数の平均は、Xは1.8個、Yは2.7個、Zは0であった。X、Yいずれの場合も、推測に有効であった情報は、「鏡に向かって話しかける」という情報であった。

〈詳細に観察して得られた情報〉に関して、パターン合成された情報の割合を見てみると、Xは20~70%、Yは46~71%、Zは0%であった(表20)。Xの75%の者は、「鏡に向かって話しかける」という行動の詳細な情報を、「責任ある役職を歴任した」という背景に関する情報と合成して推測していた。一方、Yは背景に関する情報を十分に持っていなかったために、〈はじめに注目した情報〉の種類と数はXと差がなくても、推測が部分的なものになった。Zは対象老人の背景に関する情報を持っていたにもかかわらず、情報の合成が行われなかった。これはこのケア提供者が、Oの虚構の世界は非常に多面的で推測できないと判断し、途中で情報処理を停止したためであった。

〈二次記憶の検索〉による情報が情報処理に用いられた回数の平均は、Xが1.8回、Yが2.7回、Zが0回であった。Xに属する全員が、「民生委員」「村の世話役」等の背景的な情報を用いており、虚構の世界を推測するために有効であった。一方Yは〈はじめに注目した情報〉に基づいて〈二次記憶の検索〉を行っており、対象老人の行動を十分に説明するに至らなかった。このことからYは、パターン合成の段階でボトム・アップ処理が先行し、効果的な情報処理が行われなかったといえる。

Ⅶ. 考察

1. ケア提供者が注目した情報について

本研究の対象者であるケア提供者が対象老人の虚構の世界を推測するために得た情報は、「しゃべる言葉が限られていること」「徘徊」「異食」「鏡に向かって話しかける」「入浴拒否」などのいわゆる問題行動と呼ばれる日常生活障害であった。これは雨宮⁹⁾が「一見無意味に見える痴呆性老人の行動の裏にある真の目的やニーズを知るため、行動を抑制するのではなく、冷静かつ科学的に観察することが大切である。」と述べているように、ケア提供者が痴呆性老人の虚構の世界を推測するために、その老人の特徴ともいえる日常

生活障害に何らかの意味を見いだそうとしてこれらの情報に注目したと考えられる。これはSandman¹⁰⁾の研究の過程で明らかにされたように、看護婦は痴呆の患者のケアを決定するときに患者の失われた能力に注目するという見解とも一致する。

ケア提供者が注目した3人の対象老人の虚構の世界での行動は、雨宮¹¹⁾が「同じ徘徊でも、自宅を探している場合、子供を捜している場合等もあり、その理由や目的は実にさまざまである。」と述べているように、一つ一つがその対象老人にとって意味のあるものであった。例えば対象老人Sの徘徊は旅館の仲居としての仕事を全うしようとする徘徊であり、Oの徘徊は村内の人々を引率するための徘徊であった。このように一見無意味に見える行動から虚構の世界を推測してその意味を見いだすことは、中島¹²⁾が痴呆性老人への対応の原則として述べていた「論理的な決定をしないこと、起きている事態を洞察することに強い関心を持つこと、老人のペースに合わせて看護すること、老人の感情を大切にすること」につながるものと考えられる。つまり、起きている事態を洞察するということは、虚構の世界を知ろうとすることであり、虚構の世界を知ると老人の立場に立って考えることができる。そして虚構の世界に合わせた対応を検討し、老人のペースに合わせて看護することができるようになると思われる。

背景に関する情報については、ケア提供者は対象老人の家庭生活や職業に注目していた。三好¹³⁾が「彼ら(痴呆性老人)の託す過去の自分は、いずれも社会的役割を担って頑張っていた時代である」と述べているように、これらの情報は、いずれも対象老人が社会的に認められ、充実していた時代に関する情報であった。

ケア提供者が注目した情報数については、はじめに注目した情報数の範囲が1~6個であった。また背景に関して注目した情報数の範囲は0~6個であった。これらの情報はMiller¹⁴⁾が明らかにしたように、短期記憶の貯蔵の限界が7±2以下であるという見解と一致した。

〈はじめに注目した情報〉と〈詳細に観察して得た情報〉の数は、痴呆が重度の対象老人Sの場合が最も多く、軽度のMの約2倍の数であった。このことから、痴呆による障害が多く、かつ言語的コミュニケーションが困難な場合には、虚構の世界の内容を特定することが困難であるために、多くの情報を必要とすることが考えられる。しかし本研究では、対象とした痴呆性老人が3人と少なかったため、これに関しては今後、様々な段階にある痴呆性老人を対象として検討を重ねる必要があると考える。

2. ケア提供者による虚構の世界の推測について

虚構の世界を十分に推測していたケア提供者は、対象老人の日常生活障害と、職業や家庭生活などの背景的情報とを合成していた。したがって、虚構の世界の推測は、痴呆性老人の一見無意味に見える行動を、その老人の生活史のある部分と結びつけることによって真の意味を見いだすことであると考えられる。これは中島¹⁶⁾が「(痴呆性老人は) 当人の生活史においてエピソードを作った誇りある出来事、悲哀、悲嘆などが家族・職業、それぞれの社会的出来事等と絡み、それらが時代と空間を飛び越えていつも身に迫って体験されている。」と述べていることと一致する。

対象老人Sの虚構の世界の推測は非常に困難で、十分に推測した者は5名のみであった。また、言語的コミュニケーションによる情報を得られないために、内容を特定するためにはそれを補うための多くの情報を必要とした。一方対象老人OとMの場合には、言語的コミュニケーションが可能であり、虚構の世界に生活史のどの部分が影響しているかを特定することが比較的容易であった。したがって、虚構の世界の推測のためには、言語的コミュニケーションが非常に重要であると考えられる。しかし痴呆性老人は過去を鮮明に再現する力は失われており、ケア提供者の対応の仕方によっては限らない作話になりやすい。そこで中島¹⁶⁾が述べているように、「後戻りして古い記憶の痕跡を確認する苦心よりも、今のここに隠されているかもしれない納得のいく、あるいは納得してもらえるチャンネルを探すための努力と挑戦」という姿勢で対話をすすめることが大切であると考えられる。

3. 虚構の世界の推測過程と推測内容との関連

虚構の世界を十分に推測していた場合の情報処理には、2つの特徴が認められた。1つは、パターン合成の段階ではトップ・ダウン処理とボトム・アップ処理が効率的に行われ、〈はじめに注目した情報〉と〈背景に関する情報〉とを合成していたということである。もう一つは、〈二次記憶の検索〉が、背景に関する情報に基づいて行われていたということである。

トップ・ダウン処理とボトム・アップ処理については、Palmer¹⁷⁾が「全体を理解するためには部分と全体の解釈が同時に進行することが必要である」と述べているように、〈はじめに注目した情報〉(部分)と虚構の世界の土台をなす背景的情報(全体)との解釈が同時に進行した場合に十分な推測ができたのだと考える。また逆に、ボトム・アップ処理が進行した者は、部分的な推測であった。これは増井¹³⁾が「上昇型処理(ボトム・アップ処理)だけではありとあらゆるデータを集める必要があるために、処理系に多大な負担

がかかる。…その上、データだけ集めてもそれらを統合すべきゴールが定かでない、対象なき知覚となる。」と述べていることと一致する。

〈二次記憶の検索〉については、Rumelhart¹⁹⁾が「検索には、検索過程を開始させるきっかけとなる疑問、検索の行われる文脈事態、追跡している情報に関する付加的知識などが1つになって特定の記憶内の場所への接近を容易にする制約として働く。」と述べている。つまり、痴呆性老人の虚構の世界を推測するという文脈で、〈はじめに注目した情報〉が検索過程を開始させる疑問となり、背景に関する情報が付加的知識となって、その老人の背景に関する検索が行われたと考えられる。背景に関する検索が行われず部分的な推測であった場合には、付加的知識となるべき背景に関する情報を持っていなかったか、付加的知識が行動に関する情報であったと考えられる。

情報量と推測の程度との関連に関しては、注目した情報の数よりもパターン合成された情報の数が多い者ほど虚構の世界を十分に推測することができた。これは、彼らが注目した情報が必ずしもすべて有効に利用されていたのではないことを示している。このことに関してはRumelhart²⁰⁾が「我々は意味記憶内のカテゴリや概念や事象間の相互関係に照らし合わせて外界を理解する。」と述べているように、ケア提供者の意味記憶内に、入力された情報を理解するためにデータが蓄積されていなければ、その情報は、ケア提供者によって単に無意味な行動、あるいは理解できない言葉などとして認知されることになる。また、対象老人Mの虚構の世界の推測の際に、「農家の主婦」といってもその捉え方によって虚構の世界の推測内容が異なったように、意味記憶内に蓄積されたデータが豊富であればそれだけ対象老人のとり行動の意味をより深く理解することができると思われる。

本研究では、対象老人の痴呆の程度が重度であるほどケア提供者が虚構の世界を推測しにくいという傾向が認められた。これは、Payne²¹⁾が「特に課題の複雑性が情報処理に影響を与える変数の一つである」と述べたことと一致する。しかしながら本研究では痴呆性老人の対象者を3人としたため、統計的な証明には至らなかった。これは本研究の限界であり、今後さらに多様な状態の痴呆性老人を対象とした上での検討が必要と考える。

VIII. 結論

1. 結論

本研究の結果、以下のことが明らかになった。

1) 痴呆性老人を専門にケアしているケア提供者は、

対象老人の虚構の世界を推測する手がかりとして、主に徘徊や異食等の日常生活障害に注目していた。さらに、その老人の家庭生活や職業などといった、背景に関する情報に注目しており、これは老人が社会的に認められ、充実していた時代に関する情報であった。

- 2) ケア提供者は、対象老人の日常生活障害に関する情報と家庭生活や職業などの情報とを合成することによって虚構の世界を推測していた。
- 3) 痴呆による障害が多く、言語的コミュニケーションが困難な対象老人の場合、虚構の世界を推測するために、〈始めに注目した情報〉およびそれを〈詳細に観察して得た情報〉は、痴呆による障害が少なく、言語的コミュニケーションが可能な対象老人の場合の約2倍の情報量を必要とした。これは、虚構の世界の内容を特定するためには、言語的コミュニケーションによる情報を補うだけの、多くの情報を得る必要があったためと考えられた。
- 4) 十分に虚構の世界を推測していたケア提供者の情報処理には、以下の2つの特徴が認められた。
 - ・パターン合成の段階ではトップ・ダウン処理とボトム・アップ処理が効率よく行われ、〈はじめに注目した情報〉と、〈背景に関する情報〉とを合成していた。
 - ・二次記憶の検索は、対象老人の背景に関する情報に基づいて行われていた。

2. 看護への提言

本研究の結果としてケア提供者は、痴呆性老人の日常生活行動の中でも特に日常生活障害に注目し、それらの情報を背景に関する情報の中で、特にその老人が社会的な役割を担って最も充実していた時代の情報と

結びつけることによって虚構の世界を推測していた。したがって、痴呆性老人のケアを行う際には日常生活障害あるいは問題行動を単に無意味な行動としてとらえるのではなく、虚構の世界を知るための手がかりとしてさらに詳しく観察し、そこから虚構の世界を知ろうとする姿勢が大切であると考ええる。そのためには、老人の過去の人生や生活に関する情報を記憶にインプットしておき、日常生活障害と結びつけて考えられるようにしておくことが重要である。また、言語的コミュニケーションが困難な老人の場合には、非言語的コミュニケーションも組み合わせた情報収集をする必要があると考える。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究では、ケア提供者が虚構の世界を推測するために対象老人と関わっている場面を参加観察し、その後虚構の世界を推測する過程をインタビューしているために、実際に遂行された推測過程との一致という点で、いくらかの偏りが生じている可能性がある。また、本研究の対象者の性質上、フィールドや対象者の数が限定されるために人数が少ないことと、研究施設の特性が結果に影響を及ぼし、偏りが生じている可能性がある。

今後は、対象となるケア提供者および痴呆性老人の数やフィールドを拡大することにより、結果の信頼性、妥当性を高めてゆく必要がある。また、虚構の世界を推測する能力とケア提供者の個人特性との関連性、および痴呆の程度と虚構の世界の推測の程度との関連性についても追求する必要がある。さらに、痴呆性老人との関わりの中で虚構の世界を推測しているケア提供者のthinking aloudによる報告を得るための方法の開発も必要であると考ええる。

引用文献

- 1) <http://www2f.biglobe.ne.jp>
- 2) 同上
- 3) 雨宮克彦：アルツハイマー型老年痴呆のケア，第2回高齢者シンポジウム抄録集，p189，1991。
- 4) A.W.Combs,A.C.Richards,F.Richards:Perceptual psychology:A humanistic approach to the study of person,1988，大沢博，今城真帆訳：認識心理学(上)；人間研究へのヒューマンスティック・アプローチ，ブレーン出版，p27，1990。
- 5) A.W.Combs,A.C.Richards,F.Richards:Perceptual psychology:A humanistic approach to the study of person,1988，大沢博，今城真帆訳：認識心理学(下)；人間研究へのヒューマンスティック・アプローチ，ブレーン出版，p198，1990。
- 6) 同書，pp213-214。
- 7) D.E.Rumelhart:Introduction to Human Information, 1977，御領謙：人間の情報処理：新しい認知心理学へのいざない，p112，サイエンス社，1988。
- 8) 新井平伊ら：痴呆症状評価尺度GBSスケールの日本語訳作成とその信頼性の検討について，精神医学，32(4)，pp371-374，1990。
- 9) 雨宮克彦：アルツハイマー型老年痴呆のケア，第2回高齢者シンポジウム抄録集，p188，1991。

- 10) P.O.Sandman et al.:Morning care of patients with Alzheimer-type dementia;A theoretical model based on direct observations,Journal of Advanced Nursing,11,pp369-378,1988.
- 11) 雨宮克彦：前掲論文, p188.
- 12) 中島紀恵子：在宅痴呆老人とその家族へのクオリティ・オブ・ナーシング, 日野原重明：老人患者のクオリティ・オブ・ライフ, p54, 中央法規, 1988.
- 13) 三好春樹：老人の生活ケア〈生活障害〉への新しい看護の視点, p92, 医学書院, 1986.
- 14) D.E.Rumelhart：前掲書, p204.
- 15) 中島紀恵子：前掲書, p54.
- 16) 同書, p60-61.
- 17) D.E.Rumelhart：前掲書, p98.
- 18) 増井透：トップ・ダウン処理とボトム・アップ処理, 大島尚編：認知科学, pp119-120, 新曜社, 1986.
- 19) D.E.Rumelhart：前掲書, p257.
- 20) 同書, pp250-251.
- 21) J.Payne:Task complexity and contingent processing search and protocolanalysis, oganizational and human perfomance,16,p336, 1976.

Abstract

Process whereby caregivers inference the fabricated world of elderly demented patients

Masako Minamikawa¹⁾

The purpose of this study was to ascertain the process whereby caregivers inference fabricated world of elderly demented patients by clarifying what type of information is collected and how it is processed by caregivers.

A conceptual model was prepared for the process whereby caregivers inference the fabricated world of elderly demented patients. The model was based on cognitive inferential methods in the field of cognitive psychology and the human information processing system proposed by D.E.Rumelhart.Through the use of this conceptual model,the process whereby caregivers inference the fabricated world of elderly demented patients and the interrelationships among the content,degree and process were analyzed using data obtained by observations, interviews and basic surveys.

The following findings were based on an analysis of data obtained from observations of twelve caregivers.To infer a fabricated world,caregivers paid particular attention to unusual behavior in daily-living activities, such as wandering about or eating foreign objects; family life; and occupation. The amount of collected data was within 7 ± 2 range in all cases. In addition,about twice the amount of data was required for caregivers to infer fabricated worlds when severe dementia-induced disability made conversation difficult when compared to cases where conversations were possible. Analysis of the data revealed that the fabricated world of older demented patients was infered more clearly when the amount of pattern-synthesized data was high(combination of visuoauditory information with memory)than when the amount of data obtained by initial and subsequent analyses was high.

Key words

elderly demented patients, caregivers, fabricated world, information processing, inference

1) St. Luke's College of Nursing